

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	部報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 158: 189-230
Issue date	1915-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6516">http://hdl.handle.net/2298/6516</a>
Right	

## 部 報

### 演説部報

#### 公開演説會 （中）

二月廿八日午後一時より於縣會議場常ならば小春日和の暖かさに梅の香を愛でん時なれども今日は折悪しう雪降りて、道さへ知れず往き交ふ人も稀に、雪の景色、靜かなる調を破るは唯潺々たる白河の響……………げに靜けき自然の聲のみ。この靜かなる冬の幕を破りて力強き白熱の舞臺は擡げられぬ

#### 第一席 開會辭 一、二、乙 前田 一君

新らしき委員の榮譽と希望を負うて徐々々登壇。動搖めき渡る喝采の小止みとなるをしほに、力と美との調和を説き終り、「昔ジャンジャク、ルソーは松火を掲げてパリーの街頭に叫んだ。今や龍南の論客は現代の闇を照すべき松火を振翳して間もなく此壇上に登るであらう」と流暢なる口調。絢爛の辭。はやくも四百の聴衆を酔はしめて陽々たる春風はまつ堂にめぐりぬ。

#### 第二席 日本の將來 一、二、甲 小河正儀君

侃々の辯。論する所は帝國の使命と理想。不拔の精神あくまでも自己の所信を、述べて最後に「落葉の囁を聞いてお覽なさい」と麗はしい文句に論を終れば一時に起る喝采の響、堂も破らん斗りなりき。

吾人は希望ある未來に生きなければならぬ困難に逢つても泰然自若たらしむるものは希望の光である。而して我國は維新以來探つて居つた幾多の目的を今や殆んど完成した茲に今更に一步を進めて大理想を立てなければ彼の歴山大王やローマの徵を踏むに至るであらう。

卅年の普魯富蘇峰は平和、平民、商業の主義を唱導した今又獨逸ペルンハルゲーは「戦は必要なるのも國家最高の道徳也」と云つたとして獨逸の爲め世界統一主義軍に主義を高唱して國民の自覺を喚起してゐる。儼然らば吾々日本の將來は奈何平和主義か軍國主義帝國主義か世界主義か。而して今日世界人類の最も渴望せるものは平和である。然し私も平和を愛すとしてそれに一つの獨斷が下して見たい即ち平和とは道理の行はる状態人道の行はるゝ有様であつて別に何等競争と兩立し難きものでもなければ必しも戦争と衝突するものでもない。故に旗號堂々たる日獨の關係が隱顯卑劣なる日米の關係より少しは平和である云ふ結論に達する。若しかくの如くてあらば平和程願はしきものはないがこの平和を最近甚だしく壓迫して來たものは東西兩民族及その思想の衝突であるこの衝突は歴史的に云へばパミール高原から東と西に分れた民

族が終ひにツロヤの征伐にその急鬨の幕を切つて歴山大王ローマ時代は西方優勢の時代であつたがオノンの流の蛟龍雲に昇つて成吉思汗の時代となり更にサラセンの勃興又土耳其の興起と相次いで東方民族全盛を極めた。然し一度この文化を輸入したる歐洲では科學の進歩航海の發達に俟つて日進月歩今迄の東西兩力の衝突地は地中海から印度洋更に太平洋となつて西方隆盛時代を現出してゐる。ツロヤの戰より波斯隆盛に至る間、更に蒙古隆盛と一歩進んで海上發見時代に至るその間各五百年を以て交替するリズムを有するのである然るに今は海上發見時代を去る正に五〇〇年東方復興は天の時である。又世界の文明はメソポタミアに起つて一方東漸して印度支那を経て日本に及んだ又一方は希臘に入りて新生命を開き西漸して太西太平洋を横斷して浦賀灣頭に曉鐘をついた。吾國は今や東西兩文明の合流點にある。この特色ある兩文明の融和し更に大新文明を齎らす事が吾の使命ではあるまいか。吾には正義と所謂平和を以て又思想を以て世界を統一せんとするのである。天の時地の利を有して之に加ふるに人の和たる力を以て働かしむれば天下易々として動くや必せりである。思ふに世界平和統一主義は建國以來の國是である。吾人は一大決心を以て國家の力とならなければならぬ

### 第三席 正義の犠牲

一、三、甲 坂内正行君

「第二の尾崎行雄ともなりて」口には云はねど心底確かに見届けたり。羽織袴も麗はしう靜々と登壇。卓左端を右手にて押へ開口一番「諸君……吾々極東の

國民をして其骨をさし其肉を切るの悲惨なる出來事が極めて多い」と先づ坂田式を發揮し、加ふるに巧なるアートと快潤なる辯舌は相倚つて義憤的演説の最美を濟したりき。

今度の歐洲戰爭にては部分的にも悲劇を見ないではないが一國家として一國民としてその勇敢義烈なること彼白耳義國民の如きは蓋史上稀に見る所である。白耳義は古來幾度か歐洲列強の配下に苦しめられ、或は奧多利に、或は佛蘭西に、或は又和蘭に屬してゐたので、その獨立したのは一八三九年四月である。この時英普佛奧の四國により永久中立國たるの保証を與へらんだのは吾人の善く知る處である。然るに獨國は一九一四の八月二日白國に最後の通牒を送つて「獨軍をして自由にその領土を通過せしむべし若し之を拒まば我國は貴國を以て敵と見做なさん」と而して白國はこの返事を僅に十二時間内にせねばならなかつた。結果は終ひに獨逸軍の中立國侵害となつた衆寡敵せずエーッ、ナムール防ぐに由なくアントワープは今や國家興廢の決する一要塞となりて昔カルタゴ人が喩はつた奮戦悲慘は顔前に迫つたのである。凡そ戰は目的に非ずして手段である。殺人放火掠奪を以て人生の目的終れりとなし人類の本能の如く心得ゆる彼等獨逸軍の殘忍なるに至りては天人共に憤らざるを得ないのである。老婆殺され少女燒かれ時としては婦人小兒を捕て陣前に進ましめ白軍の銃火を避けんとしたり。あゝ人間を捕て以て糧とする事天下何れの地何れの時代にかある獨逸人が日々研究して世界に其美を誇る所のものは如

何にせよ最も有功に外國人を殺し得るかの問題ではあるまいか。然しなから苟も此世に主義なるものの存する限り必ずやカイゼルと雖も獨逸國軍隊と雖も脚下に蹂躪せられて白國の自由獨立の日來るは日を見るより明かなる事であらねばならぬ。あゝ正義の爲めに奮戦する國民の末路果して終ひに悲慘なるか。人道のために強者に向ふ國家の最後果して無殘なるものであるか。天道善に組せずして邪道は最後の勝利者たるかの問題を解決するは唯、今度白耳國に對しての全世界の同情と義憤如何に依るのである。我國由來邪道不義を惡む國民性を有して其處に武士道の精神が存するのである。冀くば美しき同情美俠の心を以て彼等憐む可き白耳人をして再生せしめ以て天日を拜して赫々たる一道の光明を與へしめたくものである。

#### 第四節 天籟の韵

一、三、甲 松岡英介君

誰が云ひ出でたらむ剛毅朴訥の權化とは、あくまでも小さき體軀を掲げて登壇、鞏固なる精神、力強き意志を眉宇の間に動かせば聴衆片睡を呑んで滿堂頓に鳴を静めぬ。さて説き出づるは雨か嵐か。あらず清らかなる天籟の韵なり。「私等は貴き過去の犠牲を以て築きあげたる現實の稱を祝したいのであります」と論を起して深遠なる君の人生觀に進みぬ。

ハスカル謂へらく「我考ふ故に我存す」と、吾々が存在の自覺を徹底せしむる所に眞の存在なることが明かなるのである。地下三尺

のそこには清泉が遡つて居るではないか吾々が靜かに我を顧み私の正体本來の面目を確めんと努力する時に吾々の胸の奥底と琴線に天籟の韵が聞ゆるのである。思ふに人生宇宙は一大スフィンクスである。二つの謎を透過する時は直に私の自覺ある永遠の旅路に進む事を許され、この難問を解決し得ざれば人は生命を奪はれてその餌となる外はない。然し吾人はエカバを呼び起してその智慧を借る事は出来ないのである。スヒングスの謎は自ら解かなければならぬ。是は他人の問題ではなくして自己生命の問題である。

然し私は絶対に他力を排しはせない草木の種子の萌づに熱が必要であることを知つてゐる。この意味で私の論が諸君の胸琴と共鳴するあらば幸甚である。私は嘗て精靈不滅などの言を女々しい限りと思ひ宗教などは行詰りの手段と考へて居たが或夏長途の旅行中一僧を訪れて私の議論は破壊されて更に課するに「我々自分は何故又何處より自分の父母の体を假つて出でたか」と云ふ問題を以てせられた私は古杉の根幽谷清水の下に考へても遂ひに科學的解釋を得なかつたのである。其後私の考は變化して遂ひに今日に至つたのである。諸君。人には天折長命の別は有れども同じく精靈を有する又此自然には磅礴充溢せる靈の流がある自然の生命の流れは日月星辰となり山川草木人類禽獸として体現し居る、四時の變も大自然の意志である。吾々はこの意志を信じ之を究めて生命の源泉に觸れ始めて大悟徹底して自然の意志に答体する事が出来ると思ふのであります。この自然の意志は時と所に從つて萬物の本性となつて居るのである。釋迦は佛と云ひ基督は神孔子は之を天命と云つた、中庸には天命之謂性率性之謂道とある近江聖人や

王陽明の言葉にも之に類したのを見るのである。吾々は科學的生活に満足する能はず精神生活に入り吾々は我々の本体萬物の本性を確めてこの小我と宇宙の大我とを一致せしめなければならぬかくて自我の徹底に入るのである。この世には無限の自然力を嘆美して人の力の足らざるを諦むる不自由を自覺する自由と永遠なる性を有する宇宙を自由無限の境と考へそこに本分を盡すは一大自由なりと考ふる二自由がある。私等は後者の絕對なる自由の力によりて宇宙の一分子としての本分を盡し自己の意義ある生活なせなければならぬ。

緒君徹底を求めて終ひに得ず人生終ひに不可解を叫びんとする時に更に寒風に向つて頭布を取れ。ユーゴーの所謂「何處へか知らぬが慕進せよ」流汗淋漓全力を出して働け。人生の眞意義天籟の韵は濤ゆるであらう。

## 第五席 腰間の秋水三尺 一、三、丙 高山義三君

五高論界一方の驍將として君に期待せし所甚大。さはれ急嚴の拍手は今や君を包みて壇上の人たらしめぬ。凜然たる霸氣人を壓して咳一番。豊富なる君が思想の一端は懸河の綫を織出してやつぎに出づる壯快の文辭は聴衆も應援に違なき有様なり。まづ侃諤の聲は發せられぬ。

諸君個人の健全なる發達は健全なる國家の保障によりて始めて成り、健全なる國家は健全なる個人の集合によりてのみ形成せらる

るのである。されば健全なる個人の發達を希ふものは國家を重す可きが當然なるに、近來個人主義を標榜する人の中に動くもすれば國家を輕視する人あるは誠に遺憾千萬である。然し今度の歐洲大亂は國家に對する忘恩の徒を大いに戒めたるの觀あり、ジャンエカールの言の如く眞の平和を得んには吾人は先づ健全なる祖國を有すべく、吾人の自由も幸福も先づ健全なる祖國ありての事である。

最近或傳道師と戦争と平和と云ふ問題に就て語つた私はその空漠なる平和夢想に驚いた。勿論私も平和を愛する然し有象無象の單純なる論には飽きたのである。吾等が今日一國內に於て自己の尊嚴を維持しようとする努力すると共に他人の人格をも尊重して相共に平和の生活を遂つて居る如くに吾人は吾民族の特性を重んずる如く他民族の特性を尊重し眞の平和は得られ各國民族がその使命を負うた團體を作つて長短相補ひ有無相交換してこそ人類眞實の幸福が得らるゝものと信するのである。私はベルンハルダーの様な得手勝手な辭を吐くものでないが又トルストイを担いて否戰論を唱ふるものでもない。單に空想を描くに非ずして世界今日の事實に就て我國の經綸を考ふる際軍備の充實も實に等閑に附す可らざる問題である。吾人は日米移民問題を見ても彼等白人は黃人は神の子に非ずとも信ぜるやを疑ふが如き場合なれば一切空漠なる理想論を離れて何處までも事實を中心として考へねばならぬ。人種的偏見未だ去らず異教徒の執念尙失せず列國貪慾の眼を見張つて儼然武裝を爲す中に在りて軍備不充分にては空しく豺狼の好餌となる外はない。今や歐洲の戰亂は色々の理想に先立つて事實

上座にその進行を見て居るではないか。あゝ今はノルマンエンゼルの現代戦争論は見事そのオーソリティーを失つて只主戰論者の凱歌を聞くのみである而して吾人は今日に於て武備を撤廢しては平和を保証し得ざるを承認して所謂武裝的平和の外策なきを主張するものである。現代は尙充實せる武裝が要求せらるる腰に明々たる三尺の秋水を用意して居らなければならぬ。唯吾人は領土侵略の爲めに武備をなさんとする一般の主戰論を斷して行を共にせない。

この劍は正義の爲めの武器である。正義人道の爲めに一度鞘を拂へば一刀の下に敵首を粉碎せれば止まぬのである。開戦を叫んで忽ち不面目なる講和を結ぶが如き有様では駄目だ。腰間の秋水は飽くまでも明々光々磨いて置く可きである。而も容易に抜く可らずである。

## 第六席 天國は火光劍影の下に在り

一、三、甲 津田元一君

百雷の喝采に迎へられて壇上に現はれし津田君の長軀、今日や一段の潑刺たる生氣を覺て今更の如くに喜ばれぬ。龍南論界の重鎮として君が奮戰努力の麗はしさよ。心あるものこそは君が風姿に接する毎に胸深く「我論壇の恩人」てふ無量の感謝と喜悅に満たさるゝ者なれ。好漢立つて面前に在り。絢爛の辭。莊重の辯。あゝ今は何をか云はん當日の聴衆に聞け。

今を去る事百六十年の昔印度ベンガルの會長スラシヤドウラは暴虐にして生來英人を嫌ひ或時百四十余名の英人を捕へて之を僅か方二十尺なる牢獄に投じた。その悲惨見るに忍びなかつたがその翌朝に至つて死骸累々として横はつた云ふ。是ぞ印度史に有名なブラツクホールの事件である。而して此報に接して英雄ロバートクライは切齒扼腕遂に意を決してドウラ討伐の師を起したのである。諸君今や翻つて日本帝國の現状を思ふ時亦一つのブラクホールを感ぜざるを得ないではないか。支那に於ても排斥せられ、米國に於ても、將又南洋濠洲に於ても排斥せられて一孤島に閑居せなければならぬ有様。然も年々七八十萬人の増殖あるを奈何せんやである。其結果生活難就職難の窮迫となつて骨肉相食み朋友相賣り狂ひ泣き叫ぶ現狀、已にブラクホールに髣髴たりにせば誰か斷然意を決して同胞の危急を救ひしロバートクライたる可き者であるが。南進北馳東行西走悉く衝突を來さん事を恐れて則ち止むが如くして満足せば國民の經濟救濟國家の進展は何の處何の時に可期する事が出來よう。茲に至つて私は彼サラセン帝國の建設者ムハメットを想起する。彼は沈痛なる口調を以て「天國は火光劍影の下に在り」と喝破した。又彼の後繼者も左手にユーラン右手に劍を掲げて以て帝國の擴張を圖つた。何たる男性的要求英雄的態度であるか。徒らに他國の厚意を恃み他國の親善を待つて植民せんと云ふが如きは興隆せる國家の良策でない。又國を立てるには仁義道德に依らなければならず又之によりて列國を歸服せしむ可きなりと云ふが如きは三千年來の理想論ではあるが敢て當面の急務を救ふ策ではない、國際間只利害に依りて一致

不一致を生じ弱肉強食の理法は存在するも何ぞ高尚なる道徳あらんやである私は爆弾を携へざる植民政策は云ふ可くして行ふ可べからざるものと思ふ。又「サラセローマは劍戟を以て天下を取りし故に今日皆亡びしに非ずや」と云ふ者あらば眞に史眼ある學者の言葉さば受取れない。彼等の滅因誠に多いと雖も劍戟を以て進んで滅亡したる事未嘗て知らない所で吾人は寧ろ彼等が劍戟を執るの雄心意氣沮喪したを以て其の一人となさん欲する者である。天國は火光劍影の下に在り萬事を解決するものは辯論に非ず嘆願に非ず只だ鐵と血とのみ。「我を侮辱するか然らば我が劍を受けよ」と主張する男性的態度のみである。吾人は邦家多難の際勇敢剛毅の青年が須らくセシルローズを學びクライブを學びスタンフォードラツフルとなりスコペレツフとなつて大に運命を劍影の下に試られん事を希望する。

今より二千年の昔羅馬人が「我はローマ人なり」と稱して世界を闊歩した吾人は今後必ず「我は日本人なり」と叫んで地球上に雄飛せなければならぬ。而して之が急先鋒は青年を描いて他にはない。噫壇を下るに當つて諸君が祖先より興へられたる日本刀の眞に活殺力を有する事を認められん事を切望して止まないのである。

### 第七席 龍南思想史の回顧 齊藤 教 授

胡蝶の夢に迷へるにや龍南の天地。夢ならば覺めよ  
剛毅朴訥宗の信者。……………聽け立田山寺繪卷物の  
終句を。

あゝ今や壇上に立ちし人は御僧か法師か否々是ぞ我

が龍南論界の先輩齊藤先生にこそあれ。説き出し説き去らるゝ一編華麗の詩には斗酒なほ酔はぬ英雄も唯恍然と我を忘れて耳を傾むくるのみ。諸君の中には必ずや默せるカーライル歌はざるミルトンのある事を信じ……」煽々たる餘韻を残して壇を去らるゝに及んで聽衆は茲に卒然として我に反りぬ。

十年一昔とすれば五高の思想史も大略三期に分つ事が出来る。第一上古時代とも云ふ可き廿五年より卅五年までの十年間は「取つてかまう」の時代であつた。この語源はセンチュリーや言海や辭林にはもとより是當らぬのであつて自分は何か歴史的証據を有して居らぬけれど傳説を基礎として斯く云ふのである。「取つてかまふ」は狂言などによくある聲で月清き秋の或夜立田山で叫ばれた聲である。其時多數の天狗達は片手に丸いものを提げ片手に竹輪と云ふものを持つて「取つてかまふ」と大に叫び立てたのであつた。之を換言すれば地方的豪傑の割據時代即ち群雄割據時代とも言へるのであつて曰く俺は佐賀曰く柳河曰く熊本曰く鹿児島と地方的豪傑が各々肩を怒らして居たのである。

此時代が後三十五年を一期として限られたのは變つた事が大なる原因となつたので、其後は全國から學生が集まつて來る事になつた爲め明かに一時代が劃されたのであるが、其悲劇が彼方にも此方にもあつたさうであるが、その悲劇と云ふのは赤垣源藏徳利の別れといふのであつた。其時分の文章といへば夢に朝鮮王に與ふ

るの書」といふやうなもので「赤い笑ひ」『灰色の氣分』斯うしたやうな言葉などはまだ全く無かつたのである。三十五年十二月十七日の士曜會には白線三條問題が出て今日の白筋三本の帽子が決して井上文部大臣よりは我校の食費余りに低廉に過ぐれば今少しく滋養物を取るやうにす可しとの注意がありラフカディオ・ハレン先生がゼヤア、ウエヤ、ノ、ストープ、ガンリー、ヒパチ、ミ書かれ、熊本の一商人は今日は五高でベースボールが英語である云ふが分りませうかと云つた時代である。

それが三十五年に於ける新しい制度と共に一轉機をなして三十五年より四十二年までの中古時代は天下の英雄時代である此時代となる。地方的英雄は漸く影をひそめて天下の英雄靈の如く集まつて來た時であるから思想の上にも當然變化は來て世界的となり、宇宙的となり反面に於て現代青年思潮の縮圖たるの觀を呈して來たのである、即ち此の時代には自然主義も這入つた社會主義も這入つた。又既に享樂主義のきざしも見えて居つた。其他個人主義國家主義と其の叫びは異なつたけれども各種の思想が這入つて來た。この風潮に對して昔を慕ふの情に堪へずして起つたのが中堅會で此連中は修養組として形式に於ては御辭儀の仕方などが先づ異なつて居た。今日武夫原と云う名前も其頃から起つたのである。までは武夫原といふ言葉は無く單に託摩ヶ原と云つて居た。此意味よりすれば上古時代頃取つてかまふ時代を又龍田山時代、中古時代即ち天下の英雄時代を武夫原時代と云ふ事も出来る而して此時代に於ては月下武夫原に纏引などが盛に行はれ原頭ボテ（註に曰くボテとは燒芋の事也）積んで山の如き事もあつた。

然らば四十二年後より今日に至る近世史即ち第三期の時代は一体如何なる時代であるか。之を察の無くなつた時代と云ふ上より觀れば無察時代とも言へる又色の無い時代と云ふならば無色時代であり、何事も無い時代とするならば平和時代である、顧みて二昔に溯ると第一期は剛毅朴訥時代であり、第二期は其剛毅朴訥が各種の主義風潮に揉まれた時代であつたが第三期は果して何の時であるか、孟子の言葉に藉りて言へば天の將に大任を下さんとするや何さかて望扶斯や赤痢でも大分苦しめられたのであるが兎に角第三期は今日の事であり之から先の事である文明は北漸するか南漸するか知らぬが龍田山から武夫原に下り來て、武夫原から南に出て來た五高生は南へ南へ下通町から新市街へと行くか何うか。何處から來たかそして何處へ行くかを考へて見て決して過去に歸れそ云ふのではない。將來に——此處に考ふ可き問題はあるのである。剛毅朴訥の四字は決して全く捨て去るべきものではなくして古き歌を新しき調子に合はせて歌はなければならぬのである。今此四字を縦と横より觀察すれば横に於て第一純潔であれと云ふ事であつて思想行為共に純潔であつて欲しい第二に男性的であれと云ふ事で常に男性的な調子で歌つて行きたい。次に之を縦から觀ればビー、シンブル、アンド、ストロングと言ふことにあるのである。ラフカディオ・ハレン先生も肉體は野蠻人であれ頭腦は文明人であれ、それが九州魂であるぞ叫ばれて居るのである。而して龍南の思想は決して個人のものではなく友情の團體であることな注意して貰はねばならぬ。此意義ある友情の團體であることを眞に自覺し高調して行く事が出来るならばそれは獨逸語に満點を取



る以上に價值あるものである。以上三十年間に於ける龍南思想史を日本帝國に較べて見れば、日清、日露、日獨戦争の三期に劃して見る事も出来るのである斯くて此の世界的舞臺に立てる龍南第三期は如何に將來に進むべきであるか

(先生の許を得て九州日々より轉載)

## 第八席 閉會の辭 一、二、丙 石 田 壽

「前に滌々たる白川の岬を聞き後に紅葉立山、西に銀杏の薨を愛して更に東遙に立昇る蘇峯の煙を眺めんこの龍南の天地、自然が默示する所は白熱的風光ではないか」と盛に白熱を吹いたる爲めにや將又初舞臺の怖しかりしか言葉も終らぬに全身冷汗に悶はされ、ごうやら閉會らしき文句を列べて壇を降ればやつと一日の重荷を卸したる心地す。

雪は寸に積りぬ。

白妙の何處が空やら雪の空。妙句の景を通して家路につく人、今胸に抱く感や奈何に。

衆は去りぬ堂は静まりぬ。……又聞ゆるは白河の岬なり。

(蘇之石田壽記す)

## 演題 演說會傍聽記

陽炎の閃きに、春の歡樂を謠ふ人々は、筈を曳いて龍田山を高踏する。夫もよからう。花を追ひ、鳥を迎へて、晩春の野邊を彷徨ふ者は、尙ほ自然を解し得たりと誇る。夫もよからう。橄欖の甘い泉を湛へて、血に生く若い人達を誘うて居る現代の所謂耽溺の生活、藝術研究の手段とする。夫もよからう。然し乍ら人生の事實はもつと複雑だ。もつと深刻でなければならぬ。或る事が美であり、眞であり、善であるがためには、吾人はプラトーンと共に、其の脚を地に接すると同時に、其の頭は天に接せねばならぬ。脚あるを知つて、頭あるを忘れた所謂樂天的の人は、「飲めや、食へや、明日をも知らぬ、命なり」で、五十年の満足を買い得るとなすであらう。然し吾々は何處迄も努力と云ふ事を認めたい。そして思想も文藝も哲學も宗教も、努力に依つて、革進し向上さして行き度い。自然主義や、享樂主義や、剝削主義と、現代人のハートのドン底に、得て共鳴し度がる思想の流が、春雨の霏々として、目に見えぬごも衣袂を

濕はすが如くに、浸潤して來て居るらしい。宜なる哉、現代人の多くが、脚あるを知つて、頭を忘れた。現實にのみ執著して、理想も目的もない。人生の荒野に放浪して、蒼々たる天空を仰がんとした時、彼等の眼は已に近視であつた。――

こんな事を考へて、吾龍南に望んだ時、「此處にも其の跡がある」とブンナのように叫びたい。耳を傾けて社會の聲を聞けば、龍南の意氣頽廢せり、その聲で充たされて居る。予をして云はしむれば豈に雷に龍南にのみ限らんやである。現代人の多くが利口になつた。彼等は、生のための道德を知つて來た。生のための同情、愛を知つて來た。彼等は空腹の前には、道德も、同情も、愛も一切のものを認めない。演説を聴く前に先づ下宿の夕飯に遅れざらん。と云ふ利口な考を持つて居る。成る程敬服の至りである。青年の言論には感服すべき説もあるまい。有限のタイムを費して、演舌を聴かんよりは、若かず餐前一杯の美酒だ――

吾々は演舌會に出席者の少きを泣言するものではない。然し乍ら、吾々はお互に切實なる現實の問題に

ぶつ付かつて、之を批判討究し度い。そしてもつと打算を超越して感激に生きたい。さもなくば打算を超越して、更に大きな打算に入りたい。――剛毅朴訥論――晚餐に向つて口に糊する事が、切實なる死活問題であるならば、同様に、剛毅朴訥論も亦、龍南氣風の緊要なる解決徹底を求めて止まざる、大問題ではなからうか。少くとも自分は信じて居る。現實當面の問題が解決されないで、最後の理想に到達する道筋は歩けない。自分が先に、脚あるを知つて頭あるを忘れたと云つたのは、此の邊の消息を皮肉つた積りである。演舌會に出席者の少ないのは、勿論委員の不肖の致す處であるが、龍南健兒の同情心に訴へて、吾々は以後の盛會を祈つて居る。殊に此度の様な、切實な龍南問題に對しては、もそつと眞摯に皆が研究されたらと、希つて居る。當日は僅か四十余名の聴衆に、各辯士が其の解決を訴へて居つた。前田君の開會の辞は午後三時十分――辯士の批評に移つて見よう。

#### A 剛毅朴訥論

□

一、二、丙 大野 合君

例の高尙なる諧謔が、聴衆を長時間引き付ける。「天野屋利兵衛は男で御座る」の男とは現代語の紳士である。紳士の本領は或は剛毅朴訥ではないか。然れども、紳士と云ふても、島のズボンやら、金縁目鏡やらの所謂ハイカラ漢を云ふに非ずして、男で御座ると云つた時の、男に合まるゝ意味の紳士でなければならぬ。ハイカラのカラは蠻殻のカラに同じく、空である、Empty である。之は談ずるに足らず。徒らなる衍賣的の弊衣破帽は、之れカラに過ぎず。と論ず

現代語の自我發展は正に剛毅朴訥也と結論す。

辯舌や莊重、或る時は春風洋洋たるが如く。或る時は北風凜々たるが如く、絢爛汪洋として、滞りなき處、聴者快哉を叫ばすんばあるべからず。

□ 一、二、甲 鈴川 壽男君

莊重と云はんよりは寧ろ流麗乎。長河條々として流れ、中流岩石に激して奔放跳躍するが如く、君の辯は、情激するとき懸河となり想高調する時流星となつて、聴者を征伏せずんばあらざるの概あり。論じて曰く。

剛毅朴訥とは何謂浩然之氣曰難言の類乎。櫻の朝日に輝けるを見て大和魂を想見すれども、而も説明し能はざるが如くに、之も五高と共に腦裏に浮び來る一種の氣也。と論ず。

□ 一、二、甲 中西 寅雄君

エ度の目鏡越に聴衆を一瞥して、態度の工合が定まるや、一句一語井然として段落あり。條理あり。脈路あり。論理的なり。君は趣味の人乎。口を銜いて出づる形容語の絢爛なる、其儘眞に美文の感があつた。若し君の演舌に白玉の微瑕を求めんか。余りに措辭典雅にして、時として其眞意の那邊にあるかを、捕捉するに難き點なきに非ずであつた。論じて或は信念の人に及ばし、或は主義の人に、或は同情の人に論及して剛毅朴訥の士は少くとも以上の性質を、具備せざるべからずと論及された。

□ 一、二、丙 石田 壽君

一種の權威ある熱烈火の如き舌は、君を待つて始めて見らるべく、態度莊重、音量豊富、或は春光の如く或は秋霜の如く説き去り説き來る所、龍南辯士中、老練の風あり。惜しむらくは用事のため、君の論旨

を拜聴せざりしこと。

※ 之より日英の將來に移る※、時に四時四十分、

B 日英の將來

一、二、丙 管 健次郎君

堂々たる体軀を壇上に運ぶや、宛も猛虎の襲撃する時の如き一種壯烈の感がある。口を開けば聲量充溢して、巨鐘の如く或は長嘯し、或は咆哮するに似たり。高調するや嚴肅なる態度となり、野火一發曠野を空しくするの慨がある。

曰く日英の將來は樂觀すべきものに非ず、と云ふ論旨を以つて、論難自由、諤々の正義、謹聴に價するものがあつた。

□ 一、二、乙 弘中 政男君

壇に立ちて余裕ある態度は、實に驚くの外はない。

日英の將來、やゝもすれば支那問題に論及したが、畢竟日英同盟の將來は不利全損なるを説いた。言辭痛快、君をして議政壇上に立たしむれば、正に之れ在野党の急先鋒である。銀鞍白馬揚々鞭を上げて行くも束の間、君の論は愈々佳境に入り愈々理想論となり、結局支那の處分策に力を入れた様に聞えた。

□ 一、二、丙 階川 良一君

君の論旨も前論旨とはほぼ等しく、先づ國際間には道德なしと前提を置きて、同盟や協商は頼む可きものに非ざるを詳論す。日英同盟を棄却して日露同盟を結ばんも、日獨協商を結ばんも、大体國際間に道德なきを以て、彼に紳士的態度を要求するは不可能なりと痛論し、只頼む可きは個人の力なり。個性の上に建てられたる民族の力なりと論ず、議論該博詳細密議實に君は隠れたる美花なりしかと思はれた。

閉會の辭は石田壽君によりて述べられて午後六時會を終へた。茶菓に談論面白く、宇佐美部長の講評を交へて愉快なる且つ眞摯なる此の會を散會した。赤煉瓦から蘇鉄の庭一体には晩春の香が浮動して居た。

暴言多謝—— (廿八日誌。磨影多生)

## 劍道部敗戦追憶記

短か夜の夢の名残を醒めての後に迹り行く儚ない心を考ふれば陶然として、春に酔ひ風に嘯く青春の様はこれを何といはふ。戦勝の榮光に、エクスタシーの瞬間を樂んだとて、更に、のがれ難ひ敗北の耻

辱を思ひ反せば、吾等の心は、何となく悲しい。淋びしい心に、落花を追へば惆悵として春は去つて歸らない。京は紫の春を、淀に流して、霞む難波の葦の若葉にも、越し方遠く思ひかへせば、限りなき思は縷々として湧く。逝く春を、重たき琵琶の抱き心に、かこちたりし昔の人もあるといふ——劍どるに馴たれ腕には、覺束ない業ではあるが、鐵ペンの尖端に流るゝ黒いインキを曾て流した熱い涙と、思ひつゝ、音も無く過ぎさつた數月の昔を、考へて見たい。

大正の三年も押しつまつた十二月二十四日、試験がすんで、撰手一同十一人は、あの名殘惜しい坪井の合宿に勢揃ひをした。暗い雨の日に、不安な姿をして眺められた山茶花の白い花が、ションボリ立つて居るのを、見捨てゝ友に擁せられてそこを出る。汽車は午後二時二十七分、熱誠こめし學友の聲に激勵せられて、一同の心は、何とも云へぬ。これを、強者の悲哀とも云はうか。腕を拱いて車窓の優勝旗を眺め入れば、當年の勝と榮との黄色の間から暗い運命がチラ／＼とのぞいて居る様な氣がする。「必ず

勝つ」と、友を見れば、これも笑つて眼で「勝つ」と答ふ、優勝旗を眺めては人毎に洩らす會心の笑——阿蘇の煙に、熊本に、武夫原に、學友に遠ざかり行く輾々の響は、雑多なるものを乗せて海峽の南岸に止つた。夕暮だ。兩岸の灯が暗い寒い冬の闇にかゞやいて、聯絡船の舷にくだくる波の色のみが白い。船は此岸に着いて妙な汽笛を鳴らす。旅らしい不安と、奇異とが矢張りはなれずに居る。

海岸の彼岸に全くの暮れを待ちてから、輾々の響に、結ばれ兼ねし一夜は、岡山に明けて、別れ行く若き人々の姿に、奇しき離別の哀を催さしめられ、更に、山河の漠々と、天空の悠々たるを眺めて、汽車は、白砂、青松の須磨明石を通る。幾千年の長い歴史の間に、點々と、刻せられし、絢爛なるエピソードの數々に、昔懐かしい、波の音、白鳴の樣も忽ちに消えて、大阪に入れば最う敵地だ、かくて、廿五日の午後六時京の地についた。大野熊雄氏其他出迎に來られた人々と、久濶の辭を、かはして、やがて、北村の階上、なつかしい京訛を聞く人となつた。

二十六日。宿は加茂川近く、疏水を、枕とする所

にある。眼さむれば細雨霏々、東山も曇りて見えず、疏水の流れいとしめやか。己に敵地に入りては、益々警戒を嚴重にするが如く、一同の緊張せる気分は暫時の猶豫をも許さず旺盛なる元氣を振いて、武徳殿の有志稽古に行く。更に夜は大學の道場にて稽古かへりて、東へ西へ、幾枚の葉書は、親しき友の許に書かれたのである。

二十七日。快晴。午後一時より三時まで大學の道場にて稽古、夜は、また同所にて稽古、一同の元氣は益々盛。宿にかへれば時に十時に 垂んとして居る。一同一室に會し、鶴田先生より、試合に就いての詳細なる注意あり。更に、墨痕淋漓たる三ヶ條の注意書は壁上に貼附せられた。曰く入浴の事、曰く夜間外出の事、又曰く飲食物の事、なほ大槻委員は對京醫專試合の順序を發表した。後藤君第一番にして、大槻君大將たり。床に入つても、電燈の光、眼と共に冴えて、暫しは、眠れなかつた。

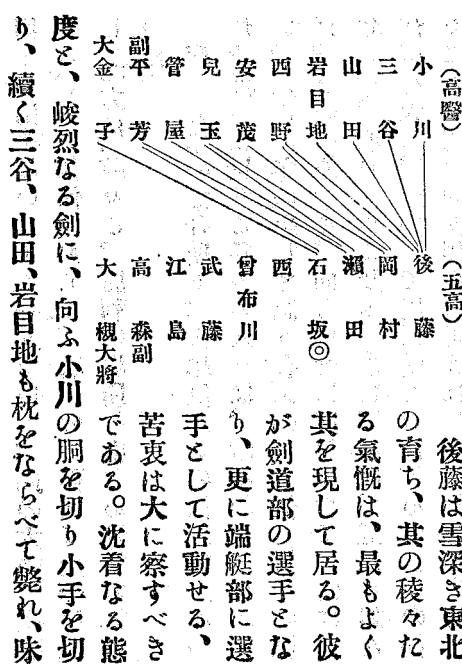
二十八日。遂に此日は來た。東山に昇る旭日の光と共に、愈吾等が第一戰の幕は切て落された。雨か風か、——而し吾等は、歴々たる勝算を以て、道場

に乗り込んだのであつた。五高對京醫の試合は第四回目、正午近い頃であつた。茲に困つたことには、日本一の剛の者、昨日來、腹を痛めて、元氣頓になく、それが爲めに、一同はどれだけ心配したことであらう。而しなほ十分に落着いた成算はあつて、遂に副將佐々木に代ふるに高森を以てした。

五高對京醫の試合は左の如し。

審判 日比野先生(八高)

内藤 先生(本部)



方の爲めに、偉大なる士氣を添へしが、西野の爲めに悲しくも斃れた。續くは

岡村。彼は熊本の生れ。武張つた國に、よく文を以て調和されたる熊中の出身である。彼が魁偉なる体軀と、雷の如き掛け聲とで、道場に、突き立つたる、其の勇姿は、實に、頼もしいものであつた。岩目地、西野、安茂は彼が爲めにはあまりに弱かつた。が、續く兒玉の爲めに、空しく敗る、何藝と立つたる

瀬田。は岡村とは、同じ中學に、練つた腕、鍛つた手並、曾て熊中に、其人ありと知られたるもの。其の得意の脱け胴の如き實に見事なるものであつた。見る見る中に兒玉、菅屋は破れて、平芳は、壘々たる味方の屍を蹴つて、勢するごく立ち上つた。敵は己に副將に及んだのである。敵も味方も、此の平芳が打ち込む切つ先を見つめたが、瀬田に、障やありけん遂に、平芳名をなして、

石坂。代る平芳は斃れて金子が出る。血戰數合、何思つたか内藤審判は一本勝負を宣告した。味方はあつと思つたが、大勢かくの如くなつては、最も、如

何とも出来ない。よく一人を以て、此の大勢を挽回することは如何であらう。石坂の横面遂に金子を斃し、味方は、靜々と、勝利の場所を引きあげたのであつた。

夜、大學の集合所で、大學側からの歡迎會があつた。再び相見ゆる各方の人々は、敵ながらなつかしい、互に昨年の事など語り合ふのも、何となく愉快だ。三高の連中と、向合はせに席をとつて、談は昨年の事、明日の事に及ぶ、事實三高は、五高と組んだ事を大に、悲觀して居た様だつた。あの言葉の節々にも、萬更御世辞とは思はれなかつた。我等も自惚れが「よもや」とは思はなかつたのに——あゝ後で考ふればさぞ運命の神の笑止に堪へなかつた事であつたらう。

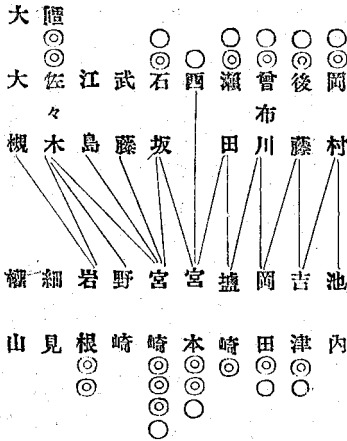
二十九日。昨日の試合は、稽古の試合。鶴田先生は、未明、霜を踏んで、四條あたりの摩利支天の祠に、勝利を祈念せられたと云ふ。人は笑ふかも知れない。而し師の君の、世にも有り難き心使ひは、選手ならぬ人は知る人ぞ知る。一同は、非常なる緊張せる氣分で出掛けねばならなかつた。七高對高醫に

七高勝ちて、其日の第二戦が五高對三高である。吾等にとりて、實に忘れられぬ試合は、清水（何所か別らぬ）持田（本部）兩審判の下に開かれたのであつた。

嵐の前の静を、大刀の殺氣に破りて、現れたのは、岡村と池内。岡村が己に勝ちほこりたる勢は、昨日よりも勢強く、池内難なく斃れて吉津出づ。後藤、

（五高）

（三高）



吉津を破り、岡田に破られ。

曾布川出づ。

味方の爲めに、

万丈の氣を吐け

がしと思ふ間に

岡田は、斃れし

も、瀬崎の爲め

に、徒らに名を

なさしめたる事

の恨めしさ、口惜しさ、瀬田は曾布川の仇を打ちたれども、宮本の難劍には、美はしき大刀すぢも用をなさず、そればかりかは、中學よりの同窓の仇をこ

そと、勇み立ちたる君武者の名も隆の君と呼ばれたる西は、青葉の笛の名残もなく、徒らに、むせぶ人々の、涙の種となつた。味方は、死屍壘々、敵の勢は、漸く冲せんとす。かげらふの如く宮崎に斃れたる石坂が、今年もまた昨年も、小成に安んずるものと、そしられん口惜しさ。それのみならば、まだ忍ぶべし。あと頼み切つたる武藤に江島、今は若木の蕾ならで、花も實もある天晴れる武者、夜半の嵐のそれならで、此の宮崎が刃に斃れる位なら、何故こんなに立派に育つたらう。其の武者振りなら、大刀筋なら、——惜しまれて散る二人より、散るを惜んだ人々の心の中は如何あつたらう。大勢を挽回すべしと思つた此二人は斃れて、味方の士氣は沮喪する敵は益々猛り狂ふばかり、曾て、北陸の荒武者を、木葉の如く散らした佐々木、仁王立ちに立つたる姿、——けれども其の姿は實に痛ましいものであつた。心ははやつても、病後の勢が如何して、思ふがまゝにならう。佐々木も己むなく岩根に切られて、大將大槻岩根に向ふ。大槻の心の中——これを選手の外の人で如何して別らう。大厦の將に斃れんとする



や、一本のよく支ふる所ではない。大勢己に決せり。

血戰數合、――あゝ遂に敗れた。まるで夢だ！立ち歸り來る大槻の姿を、顔を、太刀先を眺めては、――熱い涙が眼の底から湧き出て來る。力なく座したる大槻の面をとりてやる吾々は、如何して言が出よう。遂に吾々は敗れたのだ。遂に三高に敗れたのだ！！

曾て明治四十四年、五高劍道部の黃金時代と歌はれた時大將大野氏をのこしてチク／＼に三高を破つた先輩の切烈と苦心とは、我等とても一日として、忘れた事はなかつた、當年の若武者たりし加藤、中村の兩君は去年の若葉の頃に、龍南劍道部に滅すべからざる功績をのこして去つた。殘る吾等の此の態は――あゝ如何して此等の先輩に顔を會はするつもりなのか。曾て、外敵に、敗北の耻辱を受けたことなき劍道部の歴史に、永遠に塗抹されぬ此の汚點は實に、吾々が印したので我等は如何して、此の罪を償はうつもりなのか。

悄然としてあの大路を歸り來る選手一同の心の中は、これを何にたどへよう。歳の市に紅の旗は、鞍馬嵐に翻つて居るけれども、吾等の頭上に飾るべき

名譽の旗は己にないのである。足を痛め、膝を傷け腕に血を流して、戦ひたる後に、徒らに選手の肩にかゝるものは苦戰の武器のみ。力なくも身邊に纏はれたるマントも其のボタンをかけるに由もなく、三々また五々、無言の間に歸り去る選手の胸中――曾て一世ナポレオンが、セントヘレナに流されんとして、茫然として、後に消ね行く母國を、甲板上に眺め居たりし繪を見て、其の無限の哀愁怨恨を湛へたる顔に、限りなき同情をよせしが今の吾等の心には其等の事さへ思ひ出される。黄昏闇くして、舷にくどくる波の音も、空に迷へる白鷗の哀しき聲も――思ひかへせは其が何等かの前兆ではなかつたらうか。宿にかへれば燭さへ暗い。大槻委員は、苦しい聲をしぼつて云つた「如何も相濟まぬ事を致しました」。一同聲なく相擁して泣いた。其の時の一同の心には疑ひもなく次の戦は計畫されたのである。

其の日の優勝試合の終了は晚くなつたといふ。四高は神商に、三高は七高に、更に、四高に勝ちて、遂に優勝旗は、三高の手に歸した。實に、兵家も期すべからざる勝敗の数であつた。

三十日、後藤君先づ去り、次で曾布川、西、瀬田、武藤の諸君歸り、三十一日、佐々木、大槻、岡村、高森の四君伊勢に向ひ、淋びしさ漸く迫る。雨さへ加はりて、氣は滅入らんばかり、はりつめた心にて、一日でも、稽古して歸らうと思つたのに、かう淋びしくては、何故一所に歸らなかつたらう。江島君、其の夜奈良に去りてより彦獨り、寂寞に堪へず、鶴田先生、大野氏など打ちつれて、町を散歩せしも、幾度か淋しがり悲しがるのを笑はれた位。一日新年の如き心地もせず大野氏の下宿に移る。二階より眺むれば、杉の梢を、越えて何やら五重の塔が見ゆる、淋びしさの極みだ。其日一日を休みて、二日武徳殿に稽古に行きしも、淋しさに堪へず、蒼皇、停車場に走りて、歸國の途に上つた。

\* \* \*  
同情ある吾等の部長や、狂熱の學友諸君が、吾等を慰め勞はり給ふ其の心には、吾等は、日夜感激して、措かない。合宿を訪問したり、武徳殿に稽古振りを見に来て下さつたり。其他にも、舉げ來れば實に數限りなき心配と、面倒をかけたのである。希く

ば、武夫原に於ける、運動會や、書津湖上のボートレースの如く、諸君の眼の前で此の試合があつたらと思ふけれども、如何ともなし難い。せめて、事細かに其の様なりと、語らうと思つても、吾等の舌と筆とは、それに適しない。あゝ思へば苦しい。先輩並に學友諸君は、及ぶだけの事を、吾等に盡してくださつた。而も吾等は此の態だ、吾等を十分に責めて、頂きたい。吾等は、何時にても、其の罪に服するに躊躇しない。

吾等は、敗軍の將は、兵を談せずて教へられて居た。況や彦の如き雜兵に於てをや。けれども此の怨と、此の耻と、此の罪とは如何して忘れることが出来よう、如何して逃れることが出来よう、吾等は、苦しまぎれには選手たることを固く辭しようと思つた。吾等のあの時の氣分——そうだ、あの時の氣分は經驗なき人の想像以上だ。彦の如き劍道部の選手となつてから、他の色々の選手諸君の苦衷により大なる同情と共鳴とが、感ぜられる様になつた。或る人は、「体の良い犠牲だ」と云つて、吾等選手の手事を冷やかに笑はれた。如何にも犠牲である。あゝ

最う多くを云ふまい。万事打算を以て、吾等は決してくなくない。男の意地と感激と——多くを云ふまい。

唯、選手諸君に心から訴へる。あの試合が済んで、再び支度部屋に歸つて、三高の連中と、互に、搦撲を交はした時、敵に面しては、笑ひながら、壁に向つて、服裝を改むる時、流れ出たあの涙は——更にまた北村の二階で互に誓つた事は——繰返しして云ふ。萬事打算的に物事を決したくない。

世代は改つて新しい委員が代られた。新らしく代るものは、そこに何等かの意味をなさねばならぬ新らしき努力の時代——それを吾等は到る所に見出す既往の諫めざるを悟るものは、更に來者の追ふべきを知らねばならぬ。今欣々として榮に向ふ木々の若葉を眺むれば自ら新らしき希望が湧いて来る。新らしき委員諸氏の新らしき抱負の實現を待つ事切也。

此の稿を草するに當りて一の悲しい事柄は始終私のペンの先端にチラツいて見えた後藤君の病院に入つたこと云ふ報知を聞いて如何に驚いた事であらう花は散つて青葉の風も心地よい頃となつた。武夫原のレンダの柔かな上に横はつて、物思にふける時。廣いベットの横が目につく。私は此の無機なる記事と同君に捧げたい其の全快の目の速ならんことを祈りたい。若葉の蔭で安眠。

## 柔道豫餞大會

五月十五日蒼空一點の雲影を見ず、龍南の天地、新緑強く輝きて、健兒の血潮を湧かしめ、鐵腕の唸りを禁じ得ず。集會する勇士は、醫專、藥專、師範、農業の選手。午後二時より五高軍對聯合軍の一大紅白勝負を舉行し、將に龍南の地を去らんとする、柔道部員への餞となす。

此の日各學校よりの見物者多く、亦勝負緊張して嘗て見ざる盛況を呈す、聯合軍は柔道界強武者の清田二段を大將に押し立て、藥專の寺田初段を副將に、陣容堅く、衝天の猛勢を以て攻めよすれば、五高軍は、一昨年の中秋熊本各學校の聯合軍を粉碎したる勇士、田中有田の兩初段を重鎮として、新進氣鋭の管初段を始め、廣辻、天野、吉岡等の老練家、山田池田、小本の若武者を中堅に、悠々不迫、此の強敵を迎へぬ。紅白互に打ちつ、打たれつ、奮戦する中、師範の桑田三名を抜き意氣天を衝く、されども野中の脊投に脆く破れ、師範の森本、同じく脊投げにて野中を仆す。一舉山崎をなめんとせしも、山崎力戰

之を喰ひとむ。五高軍は、古城進藤及び佐藤の勇士  
ばら、續けざまに數名の敵を捻り倒し、抑へ込み、  
敵軍の膽を寒からしむ。

師範の友口陣頭に立つに及び、得意のハネ巻込み見  
事きまり指原、山田、涙をのんで仆る。

されども、池田の老練なる危く此を引き分く。

農業の元氣者臣出でしも小本のハネ腰には敵すべく  
もあらず、藥專の松前續いて枕をならべんとしたる  
も、老熟せる外刈にて、辛うじて小本の長軀を疊上  
に横へしむるを得たり。中學時代美少年と輕快なる  
技量とを以て、久留米柔道會に於て名をせし醫專  
の赤松は、立つまあらせず廣辻の小内刈にて破られ  
しは、昔源平の一の谷の役に於ける敦盛直實のこと  
ども思ひ出されあはれなりけり。此の頃より五高軍  
の猛勢當るべくもあらず、廣辻小河等のため、師範  
の園田藥專の大塚等、枕をならべて討死し、藥專の  
新名決死の勢にて攻めよせしも管初段のハネ腰に破  
られ、愈々副將の寺田初段馬を陣頭に進む。悠然得  
意の脊投にて、攻め立つれば管しばゝ危く、觀る  
者手に汗し、五高軍亦額に不安の皺を漂はす、され

ども日頃の元氣に、満身の力をこめしハネ腰、ヤツ  
ト、氣聲一番、寺田の巨軀は空中に投げ飛ばされぬ、  
遂に紅軍大將清田二段、やをら体を起こして、出陣  
すれば、其の元氣の盛んなる、一舉管をおさへ込ま  
んとせしも管力戰す、されど清田の業や優れけん、  
外刈見事きまりて勝ちしはあざやかなりき。

五高軍副將有田初段、決然として出で大なる責任と  
決心とをもつて日頃練磨の早業にて、突貫的にせめ  
たつれば、流石の清田たまりかね、有田の膝車にて  
手元とらる、かくてはならじと氣をとりなほし、得  
意の外刈にて、逆襲す。互に秘術を盡くし虚をねら  
ひ、力戰奮闘風生じ、雲起らんとす、いかなる隙を  
や見出しけん、有田の電光石火の釣込み足拂ひ見事  
功を奏し清田の敗戦是非もなし。かくて名譽の勝利  
は五高軍に歸しぬ。

時に夕陽金峯山上にかゝり清風武夫原の松になる、  
賞品授與を終り茶話會を開きて、無事此の日の會を  
終る。

白(五高軍)

大將貳段 清田  
副將初段 寺田  
藥專 新名  
醫專 森田  
藥專 大塚  
師範 園田  
農業 吉岡  
醫專 赤松  
藥專 前池  
農業 臣山  
師範 友口  
全五 島元  
醫專 月木  
師範 大口  
全白 濱佐  
全小 西古  
全田 代山  
全森 本野  
全桑 原直  
全阿 部波  
三辻 乃光  
青澤 山小

中田  
初段大將  
初段副將  
初段

(勝)

熊本學生聯合講武會柔道部成績

青草の薰る風を豊かに受けてあの廣々した渡鹿の練兵場をつき抜けて騎兵聯隊の裏面を廻つて熊中の道場に着いたのは早や十一時であつた熊中、濟々黌、師範の主催學校の生徒や教職員は元より八代、玉名、鎮中、農業、商業、高工、藥專の參加學校の學生、生徒、教師も大分來會し場内には殺氣が漂うて觀る者も緊張の姿にならざるを得なかつた、熱のないのが教育者の第一の……………と惡口を叩く人があるならば先この人々に今日の試合の光景が見せたかつた自分の學校の生徒の出演してゐる時のあの顔を……

然し一体から今日の出演者を批評すると龍攘虎擊などの常用文字を直に此處で使ひ度いと思ふ様な試合は少くて汗の出る面積の勝負の様で微を穿ち妙を極むる業や電光石火の早業も餘り見られなかつた然し一体の試合が嚴肅端正で癖もなく杉木立の様な感じがして斯道發展の爲め快心の至りに堪へなかつたそんな贅口は止めていでや我校出演選手の勝負の形況を報告せん

○本校池田三郎對熊中福島義滿

池田の精悍健實又短軀を補うて餘りあり一方は熊中の重鎮中肉中脊格好の士にして當日の花形役者なりヤヲラ立つて相對峙する事數秒如何なる隙や見出しけん池田の電光石火の脊負投は見事福島を宙に浮かじて一本を取る敵先鼻柱を挫かれて啞然たり此に於て乎池田益々得意の業を連發し勇氣百倍す敵は之に怯みて退嬰し釣込足にて業を取られ更に小外刈にて一本を取らるゝ二本半を忽ちにせしめて池田常勝軍の慨を以て先づ凱歌を舉げて龍南健兒の爲め氣を吐く。××。

○本校佐藤武夫對高工佐藤直

同姓異体異名の士前者は豪壯雄健後者は奇兵精悍一は龍南の士一は高工の饒將一は体と力とに於て優り一は技を以て又一日の長あり、當日第一の勝負とも云ふべきか先本校立つて例の捻り出しの力を以て内股の業を取り敵の膽を寒からしむ敵之に怯みてやば逃腰の氣味あり武夫氣山を抜き世を蓋ふの意氣を以て象の如き体を抜いて大腰に入る見事極つて一本を取る是に於て乎敵將奮然として立ち何龍南の奴めと

足業を連發す我校武佐藤時に疲色表に現はれて危地に陥る事數回遂に釣込足にて業を取らるされど彼に技あれば我には心をも働かす力ありとて更に武佐藤振ひ立つて釣込足にて業を取り前の怨を晴すかくして戦ふ事數分一進一退觀る者をして汗を握らしめしが一本勝負となりて佐藤勝利の冠を戴く

○我校木塚新對藥專松前顯義

松前前日の我校豫饒大會に小本を抑へ込んで藥專の爲め萬丈の氣焰を吐きし快男子なり木塚又三部一年にその人ありと知らるゝ戰士なり互に立つて偵察戰を試むる中誤つて木塚大腰に入り返しを取られて敵に業を與へ木塚やゝ難色を表す敵はさるものこの虚に乗じて脊負投にて一本を取り續いて拂腰を以て更に一本を加へ木塚怨を嚙んで敵陣を退く。

空漸く晴れて五月の太陽西窓より入らんとする午後三時半、蟬の聲を殘して皆歸途に着きぬ。

(四、五、一六) (部員五生投)

庭球部京都遠征記

昨年の春吾部は必勝を期して京都に遠征し金澤醫

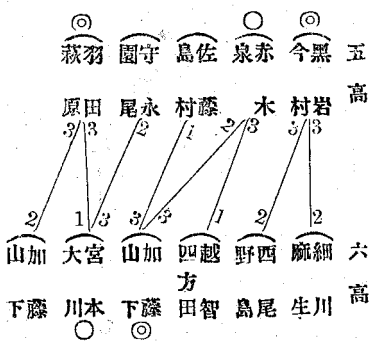
專及四高を破つたが六高に敗れ怨を呑んで歸熊した爾來選手は此の怨を晴す爲め殆ど一日も練習しない日はなかつた。六月行本君を送り立花君、谷川君、又都合上選手を辞したが、その代り新進の黒岩君を迎へ更に猛烈に練習したので強味は昨年に優ることも決して劣つてはゐないと云はれた。併し熊本に在つては腕を試めず時期がなく選手一同脾肉の嘆に堪へなかつたが幸にも昨年十月福岡大學で大會を催す事になり吾部も参加して長崎高商、七高、山口高商を倒して優勝したので聊か自信もついた。二學期に入つてからは練習の外に何も無いと云ふ有様で毎日電燈が輝く頃迄汗ごろみになつて練習した。

二月の末には九大、醫專、藥專の聯合軍を迎へて戦つたが殆ど相手にならなかつた。此に於て吾部は今度こそは優勝するに違ひないと信するに至つたが、しかし吾人は龍南一千の健兒の期待を擔つて立つてゐる者である徒に天狗になつて練習を怠る様な事はない。二學期も餘す事僅に二旬、人は追々試験の準備に取り掛かろうと云ふ時分には選手は只もう練習あるのみで、まるで不動の顔の様になつて憂然

たるラケットの響には選手の苦心と希望とが潜んでゐる様に思はれた。勿論試験中さへ練習した。かくして試験の濟んだ三月卅日午後一時半我々選手は重大なる使命を負うて各部委員、及在校諸君に送られて上熊本驛を出發した。

一行は萩原、佐藤、守永、島村、今村、赤木、園尾、泉、黒岩、羽田それに加へてマナージャー、池田の十一名である。門司驛に着いたのが六時半、此處から先輩の安日氏行を共にする事になり一行の氣焰益々揚つた、下關で晚餐を喫し八時半の列車に乘込む。これから闇の中を走る車の音を聞きながら落着かない眠りに就く、しかし京都の戦を考へると仲々寝られない。それでも、どうにかかうにか三四時間夢路に入り眼が醒めた時には列車は尾の道邊を走つてゐた。瀬戸内海の朝日は又格別よかつた。かくして京都に著いたのが午後二時、山崎、酒井等の諸先輩の迎を受け吉田町の近持園に宿をさる。長途の疲れも壓はず早速大學にたしかけて練習した。當る、當るこれなら大丈夫ともう勝つた様な氣分になつて日没頃宿に歸つた。プログラムを見ると五高は二日に對

一日には一寸打ち午後大阪高商對八高の仕合を見て夜はゆつくり休養。明くれば二日、天氣は日本晴れ必勝を期してコートに行つた。



黒岩、今村——細

川、麻生。今日の戦鬪は先づ兩組に依つて火蓋が切られた、

黒岩は五高の新進の花形強球を以て鳴り今村ストツプに名を得たる者、細川麻生の若輩の到底及ぶ所

ではないが第一回黒岩聊が場所に臆したかネットに失する事屢々無爲に敵に一點を與へついで二回をも得らる、此に於て黒岩發憤し得意の球を送り今村又着々功を奏し三回四回を回復し餘勢を驅つて五回をも得。

黒岩、今村——西尾、野島。黒岩今村細川組を破

て漸く當り出し盛に急所を突いて敵を苦しめたるも敵も善戦しゲームツオールになり最後西尾のドツペリで勝ち勇退し先づ吾軍に歡聲揚る。

赤木、泉——越智、四方田。丁度此の頃より風が吹き出し赤木巧に之を利用してロビングを上げたれば越智廻り敢へず泉又確實にとりて敵をして殆ど活動の餘地を興ずワンスリーにて赤木組の勝に歸す。

赤木、泉——加藤、山下。六高の當り組加藤、山下味方の連敗に憤激し一撃の下に赤木組を屠らんと馬を陣頭に進む、しかも赤木相變らず巧妙なるロビングを以て戦へば敵將加藤又絶好のロビングにて應戦し暫しが間ロビングの戦に兩前衛殆ど手の下し様なく第一回戦は赤木組の勝、第二回は敵の勝、第三回はジュースを繰り返へす事六回大接戦を演じたるも赤木組の運や勝りけん、最後敵のミスにて勝ち第四回戦に赤木ミス續出し遂にゲームツオールとなる此の頃より見物人熱狂し大いに聲援す。最終の決戦に赤木組サウオ側にて利あり奮闘大いに務めしも功なく遂に敵をして名を成さしむ。

佐藤、島村——加藤、山下。五高の副將佐藤、島



村莞爾としてコートに表はる、佐藤は既に定評あり島村又好個のプレーヤーなり、如何なる妙技を示さんかと刮目して待つに何事ぞ島村初回より敵前衛山下に壓迫され活動意の如くならず徒にミス多くして佐藤如何に頑張るも及ばず、只二回目島村の得点に依つて勝を得たのみ、平々凡々遂に佐藤の妙技を表はすに至らずして敗れぬ此に於て敵方に初めて喜色あり。

守永、園尾——宮本、大川。敵の大將宮本、大川組加藤組の勇退に氣を得て守永、園尾組に殺到す、開戦忽にしてゲームツとりて勢侮るべからず、しかし守永も、さるもの獨特のバックを以て盛に急所を突き好漢園尾又武者振勇しく痛快なるスマツシングに見物を陰らせ、もりかへしもりかへして遂にゲームツオールに漕ぎ付け最後の決戦に全力を盡して奮闘せしも天我に利せず惜しき所にて敗る。

羽田、萩原——宮本、大川。此に於て五高の大將羽田、萩原組勝算を胸に秘して出陣し觀衆は片唾をのんで開戦を待つ、先づ宮本のサーブにて第一球は放たるしかるに最初より羽田の巧妙なるコントロー

ルは萩原の猛烈なるスマツシングと相俟つて盛に敵を苦しめ忽ちゲームツを奪ふ、此に於て敵方顔色なくコーチ頻々としてコートに往來す、俄然敵は第三回目より戦法を變へ死者狂の鉄砲を連發し彈丸の如き速球は萩原の耳朶を掠めて羽田のバックを突く羽田之を返へせば又々目にも止まらぬ直球に見物は熱狂し敵も味方も無く只騒ぎに騒ぎ最後に宮本の萩原を突いた球ネットして萬事休す、宮本コート上にて悲憤の涙に暮れしは敵ながら哀れなりき。此の戦は實に猛烈を極め大會中の第一の激戦と云はる。

羽田、萩原——加藤、山下。先の優退組加藤山下は宮本組の憤死を見て無念やる方なく、いでや五高大將の首級を上げんと必死の覺悟を以て出陣す、兩軍は秘術を盡して、此を先途と戦ふ。第一回は羽田の得意のチビリ萩原のストップ極つて鮮に勝ちたるも第二回、第三回と回の進むに従つて又々接戦、受けては返し、返しては受け熱球に敗れ温球に勝ち混戦混戦興味絶頂に達したるが羽田、萩原組續け様にゲームを奪はれしかもカウントワンスリー羽田組の勝利は實に風前の燈火の如し。これより羽田萩原自

重してネバリたれば敵二點を失しジューズ漸く愁眉を開く。五回目はたやすく勝を得て、こゝに我軍は優退二組を残して大勝し昨年之の恨を見事に晴らす。三日、八高との仕合の筈なりしも雨天の爲め順延。四日、昨日來の雨止みて春風頓に加はり比叡の連山一幅の畫の如し。

午後二時大學の小堀井上兩氏の審判にて開戦す。

五高 八高 黒岩、今村——久

○今 黒 村 3 3 和 久 野  
○ 泉 木 0 3 上 代

○ 守 尾 0 3 赤 鷹 部 屋  
○ 島 藤 3 1 岡 本

○ 羽 原 3 3 下 本 多  
○ 萩 村 0 3 赤 鷹 部 屋

○ 今 黒 村 0 3 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

○ 赤 鷹 部 屋

領のプレッシングに泉盛に抜かれ期待せし程の激戦に至らずして敗る。

守永、園尾——鷹部屋、赤堀。鷹部屋組赤木組を破つて意氣大いに上り守永、園尾組に當る守永組初回より少し立ち後れの氣味あり形勢漸次我に不利第三回大いに務めしも調子に乗りたる鷹部屋益々當り出し遂に頽勢を挽回する能はず零敗す。

此に於て形勢互角興味加はる。

佐藤、島村——岡本、三宅。島村前日とは全く別人の如く當り大いに眞價を發揮し大抵得意のストツプに敵を惱まし、佐藤又軽く敵前衛三宅を抜いで勝つ。

佐藤、島村——本多、下川。敵の殿將本多、下川組如何に頑張るも到底佐藤組の敵に非らざる如く見なしに最初下川のストツプ成功して機先を制せらる第二回は本多のミスに依りて勝を得たるも第三回下川、大膽にも非常な大きなモーションを取りてさすがの佐藤少々面喰ひてか平常の抜き功を奏せず又々一點を得たる第四回に移れば島村佐藤を助けんと大いに奮戦し前衛同士一得一失共に良く働きジューズ

を繰り返へす數回最後に島村のストップ極つて勝ち  
いよ／＼第五回の決戦となる、此の回兩軍必死に奮  
闘して大接戦を演じたるも下川の策戦圖に當り島村  
又克く取りたるも佐藤や／＼當らず遂に敗らる、佐藤  
島村組の敗や實に惜し。

羽田、萩原——本多、下川。開戦第一球羽田下川  
を抜いて牽制し萩原又綺麗の所を見せて安々勝つ。

羽田、萩原——鷹部屋、赤堀。此に於て敵の勇退  
組鷹部屋、赤堀對羽田、萩原組の戦鬪となる此の戦  
は實に今日の勝敗の分るゝ所なり爲めに兩軍自重し  
て戦ふ、先づ鷹部屋のサーブを以て開戦。しかるに  
兩軍聊か固くなりて花々しき戦に至らず羽田、萩原  
いづれも機先を制せられゲームツ奪はる、第三回  
目羽田奮然攻撃に出でカウントツを取り有望なり  
しが運の悪き時は悪く萩原のチップ羽田のネットあ  
りて頽勢を挽回する能はず零敗を喫せらる。

黒岩、今村——鷹部屋、赤堀。味方の副將大將戦  
運拙く戦場の露と消へしかばこゝに黒岩、今村組全  
軍の輿望を負うて出陣す。技倆の上より見れば兩軍  
全く伯仲の間にあり何れをも定め難きも敵は

勝に乗じて意氣百倍せるに反し味方は枕をならべて  
憤死した後なれば黒岩、今村聊か固くなり例の強球  
も思ふに任せず今村のストップ度々奏功せしが如何  
ともする能はず。

かくして優勝を豫想されし吾庭球部は遂に八高の爲  
めに敗らる、昨は強敵六高に勝ち今日は思ひがけな  
き八高にやらる。選手の苦痛想ふべし。

四月五高對大阪高商。昨日の敗北に意氣殆ど沮喪爲  
めに頗るダレ氣味あり

#### 五 高

大阪高商

守永、園尾——喜

(守) 園尾 永 2 3 喜多村 中島

多村、中島。此の日  
守永組先鋒を承はり

(赤) 木 1 0 伊藤 岡 島 藤

敵の副將喜多村、中  
島組と戦ふ、兩軍共

(○) 今 黒 村 岩 3 3 井 島 山上

によく戦ひ一勝一敗  
勝敗の數豫測する能

(○) 島 佐 村 藤 3 3 和 齋 藤 田

はす最後に中島のス  
マツシング功を奏し

(○) 萩 羽 原 田 2 1 松 平 松 本

マツシング功を奏し

(○) 今 黒 村 岩 3 2 喜多村 中島

敵をして名を成さしむ。

敵をして名を成さしむ。

赤木、泉——喜多村、中島。兩軍元氣なく殆どミ

スを以て喜多村組勇退す。

黒岩、今村——伊藤、岡島。黒岩サーブにプレーシングに敵を翻弄してダンチにて勝つ。

黒岩、今村——井上、島山。敵は高商の大將組なり島山初當り黒岩を苦しめたるも後半如何したりけん盛にアウトを續出し之に反して今村徐々に當り出し最後のボール鮮に極まつて勝利を得て又勇退す  
佐藤、島村——和田、齋藤。島村和田の直球を盛に取りて敵をして顔色無からしむ。

佐藤、島村——松本、平松。敵の殿將松本、平松組戦友の仇を報せんと善戦大いに務め第四回目佐藤組を苦しめジユースを繰りかへす事七回に及び面白き仕合となりしが佐藤の抜きと島村のストツプ綺麗に極まつて勝ちこゝに吾軍優退二組を出す。

羽田、萩原——喜多村、中島。羽田具合悪しく當らず萩原度々奏功してゲームツォールになりたるも敗る。

黒岩、今村——喜多村、中島。初め黒岩組當らず忽ちゲームツォ奪はれしも第三回より今村思切つて動き盛に得點を數へ危き所を残して最後の勝利を得

たり、黒岩、今村の毎度の健闘は實に稱讃に價す。斯くして殘念ながら亦二勝一敗の成績に終る。

尙終に臨み京都に於ける五高出身の先輩諸君及安日兄の熱き御同情と龍南健兒諸君の熱誠なる御後援並に池田マネージャー君の御好意に對し部員一同深く感謝の辭を陳べて擱筆す。(五五生)

## 弓術部々報

### 豫饒大會 (五月八日)

天氣の快晴なりしは何よりなり。坂本師範武德會大會の爲御上洛中にて御出席なかりしは遺憾の至りなれど、宇野老先生の遠路を御厭ひなく御參會下されしこと、此遺憾を償ひて餘りありといふべし

二三子を待合せし爲會は正一時半より始まる。例により尺二の束よりす。林、岡本、山田、藤野の四君總矢して先づ景氣を付く。金的は一本づゝ廻すうち五人目の岡本君早くも之を落し喝采暫しは鳴りも止まず。されど續く十三人の面々未だ一矢を放たざるに既に人の落す所となり無念遣る瀬なく、『物の哀れ

を知らざる奴なり』と斷するものあり、『だから僕は遠慮したのだ』とは既に射て當らざりし和田御大の申譯なり。次に六寸の競射を始む五束とす。結局二中二人一中四人といふ憐れな成績なり、而して此上に位する濟々疊の林君の三中もこの人としては決してよき當りに非ず。永松、三戸、藤野、橋本の猛者連の一つだに當らざるは如何せしにや、一中二中に競射せしめて等を定めしも未だ僅に七人にして賞品八、九の兩等分餘れり、乃ち尺二に一本的中せし者に競射せしめて二人を入賞者となせり。

時恰も寫眞師來る、一同本館前の松林に移りて記念の撮影をなせり。

あとは源平なれどにて先づ茶菓を喫して元氣をつく。時間意外に早きを以て源平は二大刀とす。野次却々盛なり、輕き皮肉巧妙の諷刺隨所に風發し、滑稽笑聲亦交々絶えず、勝負次の如し

源氏	(2)	(1)	平氏	(2)	(1)
大將 林 君	○○	●●	大將 和田 君	●●	○×
赤澤 君	×	○	井上 君	●●	○×
岡本 君	●●	●●	野中 君	●●	●●

松本先生	●○	×	橋本 君	●○	○
永松 君	●●	●●	山田 君	●●	●●
藤野 君	○○	○	佐々木義君	●●	●●
市瀬 君	●○	×	井田 君	×	×
石橋 君	○○	●●	三戸 君	●○	○○
松田 君	×	○	佐々木政君	●●	×

計 七點

計 一點

○得點●零點×負點

大なる差を以て源氏方に凱歌はあがれり、勝つたる源氏方は從來の例によりて平氏に的場より這はん事を要求せしが會々平氏方に卒業生多きを以て、敬意を表してこの儀は沙汰止みとなれり

かくて樂しき會全く終りしは五時二十分頃なりき當日の入賞者左の如し

一等 林 君	二等 和田 君	三等 赤澤 君
四等 井上 君	五等 岡本 君	六等 野中 君
七等 松本先生	八等 橋本 君	九等 永松 君
金的 岡本 君		
尺二皆的中 岡本 君、林 君、山田 君、藤野 君		(欽記)

第二回熊本學生弓術大會 五月十六日  
高工に於て催さる。第一回は高工に優勝の榮を奪は

れたり然りと雖もそは固より當時豫報に接せざりし吾部の不用意を不意打せるものを以て深く恥づるを要せず、今回に至りては即然らず爾來臥薪嘗膽、忍びに忍びに練習せしを復敗るれば遂に我名を如何せん、一同奮躍して征途に上る。

集るもの五高十二人醫專十人高工十一人なり藥專は參加せず、抽籤の結果五高醫專高工の順序にて射る事となれり例によりて十回、二十本(工六寸)なり五高第一回到井上、藤野兩君先づ的中して喜色あり。高工も横山御大最初より來りて亦大に氣を吐く、我れ此日の目録見は最近非常に當りよき井上藤野兩君を援けて平常通りの手腕を振はしめ、各自亦其持場を守りて平均數を落さざるにありき。

斯くて回を重ねるに従ひて緊張の度を加へ來り勝利の欣求は益々人の頭を支配す、然るに我の頼みとせる兩君少々あせり氣味にて氣勢頓に舉らず敵又頻に兩君を彌次り倒さんとす、されど諸士の協力奮闘はよく攻勢を維持して遂に今日の勝利は五高に歸すべく豫想さるゝに至れり中牟田、赤澤、橋本の諸君殊に當りよし。

醫專は五高に續きて優勢にて高工更に之に次ぐ、然るに嗟、高工掉尾の勇を振ふに至りて由々敷大事とはなれり

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
高 累計	3	5	7	9	9	11	14	16	19	23
工 小計	3	2	2	2	0	2	3	2	3	4
五 累計	2	4	4	9	11	13	15	19	20	21
高 小計	2	2	0	5	2	2	2	4	1	1

即始めの三回は悪かりしが四回目に入りて忽ち恢復し五回以上は引き續きて九回迄勝を制す

殘る僅かに一回のみ、この一回に忽ち形勢逆轉せんとは誰しも想はざりし所、我戰士の半ば安堵の色ありしも決して無理ならず、然りと雖是決して油斷には非ず益々勇氣百倍以て敵軍に最後の止ごめを刺し去らん事を期す、彼れの彌次擲猛の極度に達し如何せん我戰士悉く上り氣味なり終に赤澤君の一本に最後の氣焔をあげて都合二本の勝越しを以て高工軍最後の奮闘に向ふ事となれり。

然るに嗟、天命とやいはん時運とやいはん、最後の回、誰か高工の一時に四本の的中を豫想するものぞ。

高工の前委員横山君、其戦振りや堂々、暗哑の音矢叫の聲の中に立ちて平然駒を進むる武者振り吾人實に敬服に堪へず、即彼れの最後の束に高工軍の勇氣頓に百倍して續々の中五の多きを算し萬事乃ち休して吾軍一隻語なし、左の結果を以て勝敗は決せり。

高工二十三本、五高二十一本、醫學十九本

尙六本の中せしもの三人四本の中せし者五人あり競射の結果入賞者は左の如し

一等 富島先生

二等 横山君(高工)

三等 林君(濟々燮)

四等 赤澤君(五高)

五等 橋本君(五高)

嗚呼我等は再び高工に敗れたり、終り迄敵を壓し乍ら今一息の所に敗れしだけ益々無念なり。前回には直に再戦を挑みて之を一蹴し去りしが今回は日既に學年末に近く兩軍現選手の盡復讐するの機會之無きを奈何、吾人の痛恨實に骨髓に徹す。然りと雖も雄飛あれば自ら雌伏あるを免れず殊に吾部は今年僅に三選手の卒業を送るのみ來る九月よりは誓つて連戦連勝以て光輝ある吾部の歴史を宣揚せん。諸員夫れ加餐自重せよ。

最後に當日の出場選手を左に。

井上春成、山田義男、三戸豊吉、中牟田長次郎、永松統治  
橋本欽治、赤澤吉平、藤野愛泉、佐々弘雄、佐々木義之、  
岡本忠臣、松田彰、  
(欽記るす)

## 春期端艇部大會

諒聞茲に明けて天地遽かに盛春の氣に溢る。乃ち大正四年四月拾四日我龍南會は端艇大會を江津湖上に催す。由來我校の端艇競争に雨は付物なりと云ふ言籤をなし此日も朝より不徹底な空模様にて觀る人觀らるゝ人の頭上に勝負以外の餘計な心配を掛けたるが、兎も角、豫定の競技を遂行し風雨の間と雖も終始一貫以て運動の精神を、遺憾なく發揮したるは、痛快なりき。

前景氣は云はずもがな。湖畔。雨に飽きたる竹林を背景に意氣と赤誠と正義とを示す緑紅白の應援旗、東奔西走する、係員の御用船、群がる土手の人垣、間に見ゆるバラソルの色、混然として、一景をなし、生氣湖上を壓す時刻愈々薄るや、玄海(赤)先づ雄姿を現はし有海(白)筑紫(緑)續いて遊戈す。出發點、

目標の準備整ひ、各員其部所に着くや、一發の號砲と共に競技は開始せられぬ。時に午前十一時卅五分零秒なり。

第一回(各部混合) 白、緑、伯仲の間にあれど赤始めより稍亂調子なり。終に四分三十秒を以て青の勝利となる。

岡田(二、一) 坂井(一、二) 南林(二、三) 樹(一、二)  
中島(二、三)

第二回(對級)標的に至るまで互に劣らず。回轉に際し白甚だ敏活にして綠之に後れしも、出發點の左側に入り規則を犯せしを以て綠復た勝つ(五分卅二秒)

(井田、山田、渡邊、大津、廣辻)

第三回(混合)青、赤大いに競ひしも、白は漕調整はず剩へ目標を倒して歸る。青、三度勝を占む(四分卅三秒)

池松(二、三) 山下(一、三) 森(二、二) 河野(二、二)  
中島(三、三)

第四回(對部)三色互に覇を競ひしも、赤の壯士揃ひを如何せん。即赤大いに勝つ(四分廿二秒)

有明、筑紫岸に憩ひ玄海中島に至る。時に零時半、

休憩盡食。

零時四十二分、玄海、つくし、有明皆艤裝す。

第五回(混合)概して振はず、白コースを亂ること甚し青、第一着(四分四十三秒)

小野島(二、三) 坂井(一、二) 小林(三、三) 上村(一、三)  
松井(二、三)

天空、灰色、層雲湖鏡に映じ凄然たり。

第六回(第二選手五分間レース)該レースの、決勝方法の、面倒臭き割には間が抜けたり。況んや、土手の上の觀客に於てをや。白一着を占む。

第七回(對部)三隻とも、力戰互に譲らざりしが終に白第一着たり(四分廿秒)

(古川、江浦、吉永、古川、楠本)

第八回(對級)白へビーを出し赤と争ひしも赤亦最善を盡し、雙方相劣らず、決勝點に近づくや、觀客自ら手に汗を握りぬ、赤終に勝つ。その差僅かに一呎。

(三三里、柳糸、北島、自高、田邊、進藤)

第九回(五分間レース)

第一選手なるが爲か、但しは前例に悟る所ありて



か各コース手際巧みなり、寧ろ技巧と策略によりて赤第一位を得。

ボツリボツリと降り居たる雨はこの時、速射砲殲の如く一時に下り人皆あはてふためきて席下、屋下、或は傘の下に蝸集する様美觀と云ふも愚かなり。まして雷雨さへ加はり、春の景色とも覺えず人々縮み合ひ居たるに選手は雨ありて無きが如く風ありてなきが如く。悠々オール靜かに定所に至る。

第十回(對級)豪雨を衝いて猛進し、各コース、往進は優劣無かりしが復進に轉じ赤緑の爭霸戰となり遂に綠の勝利に終る。(四分卅九秒)

(二、一、甲 八木、澤村、高谷、酒田、階)

第十一回(對級)赤獨り後れ白威勢よかりしも、歸路次第に綠に先だたれ、白終に抜く能はざりき(四分廿二秒)

猛雨未だ衰へず、殆んど、四寂を辨せざるに至る。乃ち小松教授案を出して曰く『直ちに對部競争に移り餘は後日に移らん哉』と。この意を体して、審判委員、本部に飛ぶ。湖上次第に舟影を没し白玉白魚

の跳るが如く、斷雲の間、光逸して雨條正に讀むべし。

杉山教授『競技續行』を決し、第十二回對級に移る。各斑老手揃ひにて、雨の所爲か四分五十九秒の長きに及びしも。面白き取組なりき。

(二、二、甲二、小島、三戸、直井、有田、村松)

雨罷み、湖面俄かに明るく、湖畔、菜の花色鮮なり、第十三回(對部)審査員の中村舊總務呼びに來られて飛び出す。白は偉人組也。一部二年乙の勇士と共に奮戰倦むことなかりしも、三部三年の怪手、流石に基調整然、始尾貫徹、能く他艇を凌ぎ決勝點に入る(四分十六秒)

時間の都合上、連續競争を、除きて直ちに、青年會競漕に入り、次いで又職員競漕、及來賓競漕を、抜きて、愈選手レースに移るることなれり。

雨衰へたれど風雲動くこと更に急なり。天地靜寂、唯だ船縁を磨する、小波の音と打ち鳴らす石油罐の響のみ高し。異なる部生を乗せたる、船二艘相寄り相離れて、のり合ふ様も、昔の海戦思はれてをかし。

二部連有明號を中島に曳上げ盛んに船腹、船底の拂

拭を行ふ如斯行爲は一應届出の上行ふべきを以て、役員用の一葉舟は、射るが如く中島に飛んで、速かにスタートに歸るべく勸告す。

三部選手の乗艇玄海は已に雄將座乗して盛んに遊戈す。紅衣、湖に映じて美なり。筑紫は宛も自信あるものゝ如く嚴然として湖の一角に泛ぶ。綠旗を掲げし一屋形船は樂隊の劉曉たる響を乗せて盛んに前景氣を付く。湖上、岸上人、遽かに群り白旗紅旗、新綠の表に翻々たり。東山雲を戴げども紫嵐漸く鮮かに金峯暗雲に峯を沒したれども、雨未だ落つべくも見えず。

四時卅分綠紅共にスタートに着く、白次いで中島を離れて同列に加はる。

審判役員の數名一葉に棹して目標の修膳に赴くに至つて又暗雲低く下り、風聊が強し。

スタートのキーは握られぬ。號砲は、暗天を擘きぬ。眼を開けば運命の手は、早や彼等の上に掛けり。鍛えし腕は今、試みられつゝあるなり。時に四時四十四分十五秒なり。艇の往進、半途に達するや礫の如き雨は容謝なく、三艇の影を暗うしぬ、万籟絶てて

人皆、石像の如し、往路半ばにして綠の明かに他の二艇を抜けるを認めたり。巧みなる廻轉の結果、綠は更に二艇に先んじ、白次いで頑強に勝を爭ひ、綠亦必死の勇を振つて漕ぎ、僅か半艇身弱を以て綠第一着の榮譽を、贏ち得たり。

時正に四時四十八分二十五秒半。歡喜の涙が悲憤の涙か雨、沛然として降る。最後の運命は迫りぬ。部の生命は茲にあり、選手の胸亦察せざるべからず。初功を立てし、筑紫は悠然として一部本營の前に泛ぶ、有明はスタート附近の河柳の間に曳き上げられ戰鬪の準備今酣なり、玄海亦本營下に靜かに戰士の來るを待つ。

暮煙漸く薄り。四顧蕭條として哀愁自ら身に沁むを覺ゆ。時針六時に近づくに及び筑紫先づ綠衣の巨魁を乗せてスタート第三コースに着す。續いて紅衣五名を乗せたる玄海は本營を離れて、第一コースに至る。有明最後に着艇して、三艇動かざるゝと十分、忽ち一發の銃聲は、黄昏の寂寞を破りぬ。時實に五時五十九分二十六秒。三艇、豪雨と風浪を犯して飛鳥の如く疾驅す。半歳の慘苦空しからず。各部、苦

## 水泳部報

心の跡歴然たり。唯だ惜むらくは青の漕調稍や齊一を失したることなり。これ地の利を缺きたるの故か時の利の合はざりしが爲か。往進半ばにして、紅綠未だ逕庭なく白漸く後れしが目標近づくに及び綠は紅に先つこと、半艇身、白、紅に後るゝこと凡一艇身半なり。目標に達するに及び綠復た回轉に妙技を用ゐて好形勢を得。綠、紅、白の順席に、復進に轉ず。紅乃ち、綠を凌がむとし、畢生の力を出し、將に之を越ねんとして果さず二艇平行、躍進したりしが、スタートに達せんとするや、綠茲に鬼神の靈力を現はして、紅を越えたり。實に六時三十分二十七秒、號砲は轟きぬ。綠。赤。白時正に六時三十分二十七秒、第一着の漕艇時間は四分一秒なりき。

斯くして二部の手にありし優勝旗は、一部に移され一部は江津湖上龍南端艇の覇者となりぬ。

大會茲に終る。

噫來年の覇者それ何部ぞや、各部夫れ自重自愛せよ。

(愚歌生略記)

炎帝の攻撃、日に猛烈を極むる時、我が水泳部は、愈活動の期に入らむとす。以下大略游泳術の由來を述べん。

大古蒙昧なる自然經濟時代に在りては、水に近き者は魚介を漁りて之を食とす。故に人は生存の必要上自然的に游泳なる者を覺えたり。此の時代に於ては最も原始的なる、犬かきなる種の者なりしならむと思はる。之は現今も尙存在し——ドッグスイミングなる者英國にも有之——全く游泳を知らざる子供にても水中に入り身の危険に瀕するや知らずして本能的に之を爲す者なり。我が水泳部には犬かきのみにて十湮遠泳にがんばりし者さへあり。

次は専ら對戦上及び自衛上の目的となりし時代なり即戰亂の時代に於ては川を利用して對陣する時等水泳の必要を痛切に感じたるなり。源平盛衰記に「佐々木の郎黨に、常陸の國住人鹿島興一とて無双の水練あり。鎧脱ぎ置き褌をかき腰には鎌を指し、手には熊手を以て河の底に入り良久沈みくぐりて、亂杭

逆母本引落し大綱小網切棄てけり。實の器量と見たりけり』(宇治川)とあり。此の時代より游泳も弓矢の道と同じく發達せり。

次は専ら体育、德育上の目的となりし時代、即近世の發達時代也。徳川氏覇府を江戸に開や専ら意を武事に注ぐに至る。游泳術の進歩も亦實に此の時にあり。各藩にて斯術を奨勵する事甚しく、之が爲めに場所により獨特の水勢に適する如き泳法行はれ種々の流派を生じたるなり。例へば流れ急なる河などに起れる水府流の如きは重に横体を用ひ、觀海流の如き海に源を發する者に在りては重に平体を以てするが如し。現今存在せる流派を擧ぐれば、河井流、武田流、小堀流、水府流、神傳流、向井流、觀海流等にして小堀流は熊本に起り小堀長須氏之れが開祖たり。特に立泳(卷足)に得意なり。

以上は我が國游泳の發達の大略史なり。

游泳が如何に吾人に必要なるかは今更喋々を要せざる所なり。適宜に身体各部を使用するを以て運動中に此れに勝るものなく、特に皮膚を強壯ならしめ、風を引かぬ事驚くばかりになるなり。而して我が龍

南會には幸にして完全なる水泳部の設備あり。風光明媚の唐津灣、白砂青松二里に亘れる虹之松原のある所玄海の怒濤と闘ふは蓋し痛快事なり。

唐津附近名所舊跡の見る可き者亦頗多し。神功皇后を祭れる玉島神社、秀吉朝鮮征伐の本營たりし名古屋城趾ありて共に昔を語る。玄武岩の洞窟七ツ釜の絶景、立神岩、烏帽子燈臺皆天下の壯觀たり。龍南の健兒よ、七旬の休暇を無意味に過ぐさず、海國男子の本領を發揮すべく水泳部を利用せよ。

合宿所 佐賀縣唐津町四之濱金波樓

期 日 七月十五日より八月十日迄(期間は來會者隨意)

合宿料 一日平均四十錢以内

來會の節は各自毛布御持參を希ふ

## 總務部報

本會會計の狀態は如何、會員の納付する會費は如何に費さるゝかてふ事は當に會員一同に周知せらるべきものなるを信するを以てこゝに大正三年度決算と共に三月廿三日の委員會に於て決定したる大正四年總豫算をば稍詳細に報告せしむとす

# ○大正三年度決算收入の部

## 收入の部

通常會員會費	一、八二六、三〇〇
新入會員入會金	二七七、〇〇〇
名譽會員寄附金	五六四、七八〇
預金利子	三七、一九〇
寄附金	一一、〇〇〇
基本金繰越	三〇〇、〇〇〇
前年度繰	二八三、四三〇
合計	三、二九九、七〇〇

## 支出の部

演說部	七〇、二六〇
雜誌部	四七六、六〇〇
擊劍部	二〇六、六五〇
柔道部	二一二、七三〇
弓術部	一〇二、三四〇
野球部	一八二、五二〇
庭球部	二〇〇、三七〇
端艇部	二九一、一一〇
水泳部	一〇六、六四〇
無所屬	五二九、五五〇
翌年度へ繰越	一六三、九五〇
端艇建造費の内	七五六、九八〇
合計	三、二九九、七〇〇

# ○大正四年度豫算

## 收入の部

通常會員會費	二、一二五、〇〇〇
名譽會員寄附	六二六、〇〇〇
新入會員入會金	二七〇、〇〇〇
預金利子	一〇、〇〇〇
前年度繰越金	一三〇、〇〇〇
合計	三、一五一、〇〇〇

## 支出の部

### (一) 積立金、遠征補助及豫備金

端艇建造積立金	三三五、〇〇〇
各部選手遠征旅費補助	三二〇、〇〇〇
基本積立金	一一、〇〇〇
豫備金	四一、七二〇
計	七〇七、七二〇

### (二) 演說部

例會費	二六、〇〇〇
豫餞演說會費	一一、六八〇
大會費	二〇、〇〇〇
發火演習中演說會費	七、〇〇〇
名士招待費	五、〇〇〇
外國語演說會費	一一、六〇〇

計

(三) 雜誌部

印刷費

原稿用紙代

陣中時報費

遞送費

筆墨紙代

メダル代

雜費

計

師範謝禮

助手謝禮

道具袋代

赤紐代

白紐代

名札代

鏡開費

メダル代

大會費

小使手當

木刀代

道具修理費

八一、二八〇

四五三、六〇〇

六、〇〇〇

二、五〇〇

四、八〇〇

二、〇〇〇

一〇、〇〇〇

三、〇〇〇

四八一、九〇〇

六〇、〇〇〇

三六、〇〇〇

二、二〇〇

一、〇〇〇

二、四〇〇

一、〇〇〇

二、八〇〇

二二、〇〇〇

二八、〇〇〇

一、〇〇〇

一、三〇〇

八、〇〇〇

雜費

道具新調費

師範助手稽古着

計

師範謝禮

助手謝禮

春秋大會費

鏡開費

メダル代

稽古着代

長襦股代

師範用長襦股代

稽古着修繕費

黑帶代

白帶代

名札代

小使手當

雜費

計

師範謝禮

弦代

(五) 柔道部

三、〇〇〇

三九、〇〇〇

三、〇〇〇

二〇九、七〇〇

六〇、〇〇〇

三六、〇〇〇

五一、〇〇〇

四、〇〇〇

二八、三〇〇

一〇、七五〇

二、七五〇

二、二五〇

四、〇〇〇

二、一〇〇

六〇〇

一、〇〇〇

一、〇〇〇

五、〇〇〇

二〇八、七五〇

二〇、〇〇〇

九、〇〇〇

(六) 弓術部

鞆代	六、二〇〇
同修繕費	一、〇〇〇
弓代	一、〇〇〇
同修繕費	一、〇〇〇
遠的矢代	二、〇〇〇
矢取費	六〇〇
學生弓術大會費	五、〇〇〇
春秋大會費	七、五〇〇
小會費	七、〇〇〇
的張替代	二、〇〇〇
稽古矢代	三、〇〇〇
掃除費	六〇〇
手拭代	四、三〇〇
メダル代	一〇、〇〇〇
巻藁修繕費	八〇〇
寒稽古費	一、〇〇〇
雜費	一、五〇〇
小使手當	一、〇〇〇
的框代	四六〇
屋根修繕費	一六、四五〇
運代	二、〇〇〇
計	一二四、四一〇

(七) 野球部

和製バット	一二、〇〇〇
ノックバット	二、〇〇〇
グラブ	二、〇〇〇
一B ミット	二、二五〇
C ミット	五、〇〇〇
プロテクター	九、五〇〇
ベース	四、二〇〇
アスク	二、八〇〇
ホームベース	二、〇〇〇
ネット	四、五〇〇
二號ボール	一八、〇〇〇
パプリックスクールボール	六八、〇〇〇
石灰代	七五〇
スコアブック	五〇〇
メダル代	一一、三五〇
手拭代	七、〇〇〇
運動場修理費	五、〇〇〇
春秋大會費	一二、〇〇〇
釘代	七五〇
雜費	三、〇〇〇
計	一九一、六〇〇

(八) 庭球部  
赤Mボール

八一、〇〇〇

ラケット 一〇、〇〇〇  
 同張替代 八、〇〇〇  
 コート修理費 二〇、〇〇〇  
 ネット 一五、二〇〇  
 石灰代 七五〇  
 茶桌代 一〇、六〇〇  
 手拭代 九、八〇〇  
 メダル代 一一、四〇〇  
 ライン引具 九五〇  
 ライン引板 八〇〇  
 スコアブック 一、五〇〇  
 ネットシメ 三、〇〇〇  
 薙代 一〇、〇〇〇  
 ニガリ 三、〇〇〇  
 ボール新設置 一〇、〇〇〇  
 小使手當 一、二〇〇  
 雜費 二、〇〇〇  
 計 一九九、二〇〇

(九) 端艇部

カール 八八、〇〇〇  
 クラツチ 五〇、〇〇〇  
 ストレツチャ 一四、〇〇〇  
 舵 三〇、〇〇〇

以上送料 八、〇〇〇  
 艇庫番人謝禮 八、〇〇〇  
 ホート塗換 四〇、五〇〇  
 競漕用コート及帽子 八、〇〇〇  
 艇庫浚渫費 二五、〇〇〇  
 シート 二四、〇〇〇  
 ホート修繕費 六五、〇〇〇  
 ネザ 二、〇〇〇  
 附屬品(綱、油等) 三、〇〇〇  
 揭示板、各札 一、〇〇〇  
 雜費 三、〇〇〇  
 計 三六九、五〇〇

(拾) 水泳部

師範謝禮 三五、〇〇〇  
 助手謝禮 五、〇〇〇  
 船借用賃 二一、〇〇〇  
 遠泳費 五、〇〇〇  
 山屋組立取除費 四、〇〇〇  
 師範助手用水着水褌 一、四四〇  
 増聲器新調費 六〇〇  
 飛臺組立取除費 一、五〇〇  
 小使手當 三、〇〇〇  
 海中眼鏡 五〇〇



海中限略用旗樽代

呼子

大會費

筆墨紙代

手拭及型代

旅費宿料

メダル代

道具運搬保管料

舟楫飛臺修繕費

旗竿及物干竿代

細引代

藥油代

雜費

計

(拾壹)無所屬

記念運動會費

クロスカントリー費

端艇競漕會費

前校長寫眞代

記念メダル代

雜費

計

支出總計

五〇〇

二〇〇

五〇〇

五〇〇

二、七〇〇

五、〇〇〇

九、〇〇〇

二、〇〇〇

一、〇〇〇

三〇〇

二〇〇

一、〇〇〇

一〇六、四四〇

二〇〇、〇〇〇

三〇、五〇〇

一五五、〇〇〇

一五、〇〇〇

三〇、〇〇〇

五〇、〇〇〇

四八〇、五〇〇

一五一、〇〇〇

三、

## 懸賞一等取消

前號所載の懸賞文一等『サルトル、レザルタスを読む』(内田益太郎の作)は都合により之を取消す

雑誌部

## 編輯の後に

○花曇りは春雨と變り木蔭に緑を掬んでからもう海の子となるべき時が來た。室内の深い思索から戸外の延々した活動に、郊野の細い道から大海の宏い舞臺に移り行くべき時となつた。

御互黒金の膚を競ふのもよいが此炎天の下涼風を懷にして寸閑を惜まるゝことなからんことを期して此雜誌を編み出したのである。

○此の度は原稿が不足するかも知れぬと思つてゐたが案外多數諸君の寄稿を辱うしたのは感謝に堪へない。慾を云へば矢張論説が少なくて小説や戯曲の方が多し。是とても何も文學雜誌を綴る上には差支へないのであらうが、前々回の雜誌であつたか「龍南會雜誌」に對する吾人の希望」と云ふ表題の

下に雜誌は其學校の内容分子の組成を窺はせるものだとか云ふ事が書いてあつたやうに記憶してをる。若しそうだとするならば如何に藝術のためとは云へ此方面にのみ傾くことは面白い現象ではあるまいと思ふ。後者もよい、盛んに創作さるゝがよい。けれども又前者を忘れられないやうに望む。兩々相俟つて榮えてゆくことを希望して已まぬ。敢へて野暮なことを云ふが野暮なことを云はねばならぬとは情けない。餘は賢明なる諸君の判斷にまつ。

○來學年は大々の懸賞文に應せられんことを望む。論說、紀行文、小説として揭示したが戲典は勿論加はる可きである。唯翻譯文ばかりは今度は御免蒙ることにした。之れは別に深いわけがあつたのでもない。今迄寄稿された物も中々見事であつたけれど懸賞文としては甚だ標準がとり悪い。と云へば論說と紀行文、紀行文と小説との間にも全様の困難がありそうだがそれは自ら別だ。何となれば抑も翻譯文の眞價は原文の意思を出來得るだけよく邦文に現はし而して又邦文そのものとしても

相當の價値がなくてはならぬ。然るに審査員の方々が原文を一々讀まれることも叶はず。さりとて邦文としてのみの價値を判斷しようとするれば思想上其他に於て創作の人は余程馬鹿を見る。こんな簡單な理由の下に懸賞文としては翻譯文は取らぬことにした。諸君其意を諒として深く咎め給ふな。決して文壇の自由を害ふことはないと思ふ。

○來るべき懸賞文募集に就いては左の六教授に審査の勞を御願ひした。御多忙の中を少なからぬ時間を割愛して下さるべく快諾して下さいさつた御好意を深く感謝する次第である。

審査員芳名 小松 教頭。 長江 教授

野々口 教授。 宮野 教授

佐久間 教授。 本田 教授

○先輩との連絡を取ることに御盡力を下さつた岡村教授の御厚意を此度は事務の都合上空しうしてしまつたことを衷心御詫びする次第であるが尙ほ本誌に玉稿を賜はる筈であつた沼川辯護士の御永眠を謹吊する。

○扱て漸く産聲をあげたばかりの吾々が此に幸にし

て第一回に本號を編成したかもとより不慣れではあるし始めて此の世の光を見た吾々には余りにそれが眩しくて到底諸君の満足を買ふべく價するほどの藝當は出来なかつた。然し吾人にも理想もあれば希望もある。唯年齒の表象として止まることは欲しない。必ず何物かを齎さうと期して居る。諸君も叱呼の勞を惜まれざらんことを希ふ。

○毎年の例に依つて新委員の顔振れを御披露に及んで御挨拶の代りとする。

山	下	實
上	田	吉
林		郎
山	本	正
小	島	政
		一郎